昭和五十九年度　春季公開講演要旨

東西の哲学

京都大学名誉教授　野田又夫

一

東洋の思想と西洋の思想との対比は明治以来強く意識されて来た。儒教と仏教に養われた日本の思想が明治時代に全面的に西洋の思想に対したのであった。そこで一方では西洋を熱心に学ぶとともに、他方われわれの継承して来た東洋の思想的伝統を新たな状況の中に生かそうという努力がなされた。哲学では例えば西田幾多郎先生の努力がそれである。先生は特に禅仏教の中に西洋に見られぬ独特な考え方があると認められ、これに一つの論理的体系の形を与えて西洋の哲学に張り合うものとしようと努められた。そして同じ努力はいまもわれわれの間でつづけられている。

しかしながら、戦後すでに四十年近くになって現在の状況を全体として見直すと、東西の思想の対比についてのわれわれの感じ方はよほどちがって来ているのではないかと思われる。両者の対比は以前ほどはっきりせず、むしろ両者が入りまじっているといった方が実状に合っているであろう。西田先生や田辺先生は西洋殊にドイツの哲学を実に熱心に学ばれたが、しかし禅の「無」の思想は「西洋の哲学者には分るまい」とごく自然に口ぐせのように言われた。西洋の哲学の見方を熱心に自分のものとしようとされながら、「無」の思想は西洋には異質的なものとして、しかも自らの宝として、取っておくことができると自然に信じておられたのである。そして先生の言葉をきいているわれわれも当時はそれに文句なしに同意していたのである。しかしこれは滑稽なことだったかも知れない。先生方はともかく、未熟なわれわれが東洋人であるというだけで「無」の思想が分っていたなどとはいえないからである。生活感情としてはともかく、哲学の原理として十分な思索を経てはじめて認めうる思想が、東洋人であるというだけで簡単に分る、などとはいえないはずである。

そしてさらに、いまでは「西洋の学者に分るまい」ともいえなくなっているであろう。西洋人の間に禅の熱心な修行者がいくらも生れており、禅の考え方を有意義とする哲学者はいくらも現われている。もう二十年にもなるがアメリカの若い哲学者が京都の大徳寺で禅の修行をしていて、私の研究室を来て「なぜ禅を学ばないのか」ときいたことがある。私は「当面学ぶべきことがほかにあって、それに及ばないのだ」と答えたが、その哲学者のまじめな態度に大いに感心した。西田先生の言葉とは丁度逆になった。禅は、ある西洋人には分るが、ある東洋人には却って分らぬものになっているのである。

冗談のような話になったが、私のいいたいことは、思想の原理に関しては東西の別はもともと存在せぬ、ということである。そしてこのことをはっきり認めた上で、やはり東西の思想的伝統の間にある相対的な差異を明かにすることはもちろん有益であると考えるのである。

そこでわれわれにとっては、現在の状況すなわち東西のものがいり混っている状況に対して、どういう秩序をつけうるかという

ことの方がさしあたっての問題であると思われる。われわれは哲学の古典を、古代ギリシャのものも中国の諸子百家のものもウパニシャッドや仏教のテキストも、容易に現代語訳で読みうる、という状況にあるが、それらすべてを頭の中でどういう風に整頓し秩序づけうるであろうか。

そのためには歴史を用いるよりほかないように思われる。そしてそれについての私案をここで述べてみたいと思う。――まず紀元前五、六世紀の頃に、三つの古代哲学が現われた。第一に古代ギリシャの諸哲学。「哲学」（フィロソフィア）の語はここから出た。第二にインド古代哲学。ウパニシャッドの哲学、仏教・ジャイナ教その他がほぼギリシャ哲学と平行して生れている。第三に古代中国哲学で、孔子以下諸子百家が、やはり同じ時期に現われている。（古代ギリシャのフィロソフィアは、神話を超えて成立つ学問の総称であり、その論理をゆるく解すると、古代インドの諸思想や古代中国のそれをもフィロソフィアと呼んでよい）。

さてこれらの三つの古代哲学に通ずる特色はそれぞれが多くの学派をふくむということである。（ギリシャ哲学の諸学派はいうまでもないが、インドでは例えば仏典は仏教以前に六学派を数えており、中国で文字通り諸子百家がある）。これは、先立つ宗教の時代に比して、この紀元前五、六世紀頃に、自由な思考が同じ問題に向けられ、同じ問題の解が一つ以上現われたことの結果である。――そしてやや誇張していえば三つの古代哲学群は、それぞれにおいて哲学の問いへの可能な答えを、揃えて提示していた、といえる。哲学の問題を、古代ギリシャ末期のストア哲学に従って自然学・倫理学・論理学に分けると、古代中国哲学も古代インド諸学派もいろいろな程度でこれらの問題に答えていたことが認められる。また角度をかえて世界観の諸類型（例えばディルタイの示したような）を念頭において見ると古代ギリシャはもちろんインドにも中国にもそういう思想の諸類型が認められるであろう。

ただしこのような見方は、各古代哲学を多くの哲学の集まりと考えており、その諸哲学の間には主張の対立や矛盾があることを認めねばならないから、少なくとも、いわゆる「相対主義的」な見方であるといわねばならない。けれども、哲学は唯一の真なる哲学を求めながら、現在にいたるまで多くの学派への分岐を示していて、これは同じ一つの問題についても自由な思考をゆるすという、哲学自身の本質的な要求の現われであることも認めねばならないであろう。

二

本来の哲学の最初の姿は上記三つの古代哲学であるが、歴史をひろく見ると、これら三つの哲学の成立より遙か前に、ギリシャとインドとの間の地方（両河地方とエジプト）に、極めて強力な宗教（神話）が生れており、その余波がギリシャ哲学と平行しつつ発展をつづけていた。すなわちユダヤ教・キリスト教・イスラム教の系列である。これはもちろん一つの思想的伝統をつくっているが、これらの宗教思想を、フィロソフィアの名を呼ぶことは躊躇される。詳しくは考えねばならないが、ここでは「ユダヤ教の伝統」と呼んでおく。

さて三つの古代哲学の伝統に、この特異なユダヤ宗教の伝統を加えると、その後の哲学の歴史は理解できると思う。まず古代そのものにおいて、はじめに出現した多くの学派が一つにしぼられる。そしてインドは別として、中国及び西洋では、古代の後新た

な刺戟をうけて中世の哲学が形成されるが、全体として古代末から中世を通じて、古代の古典の解釈学が哲学の主流を占めたのであった。まず中国を見ると、すでに前漢の時代に儒教が正統の哲学と認められ、それに矛盾せぬ限りにおいて他の学派の考えをもとり入れられていた。（儒教の「倫理学」に老荘派の「自然学」が加わった）。こうして後漢の時代で古代は閉ぢられるが、つづく南北朝時代において新たにインドの仏教が受けいれられ、唐代以後（中世）に正統の儒教が新たな発展を見せるのである。しかし学問の風からいえば唐宋の儒教も、後漢の儒教とひとしく古典の解釈学であった。

次に西洋ギリシャ哲学の古代以後の姿を見ると、古代末に哲学はユダヤ教の伝統と接触し、ユダヤ教の新たな形であるキリスト教と結ばれる。これは中国において南北朝時代に仏教が新たにうけいれられたことに似ているが、中国では古代と中世（唐宋以後）とはむしろ連続的であって、同じ民族が中世の新たな儒教を形成しえたのに対し、西洋では古代ローマの辺境の変族であった現在の西洋人（ゲルマン諸族）が、新たに中世文化の担い手となった。ローマ末期にはまだ哲学をもたなかった西洋人が、中世においてまずキリスト教をうけいれ、その上で、改めて古代ギリシャ哲学を学ぶ、という形で、西洋中世の哲学が展開されたのであった。中国における古代と中世との連続的推移に比して、西洋においては古代と中世との間に断絶があったのであり、この点はいろいろなことをわれわれに考えさせる。しかしその点はともかくも、中国でも西洋でも中世哲学は、古代哲学の古典の理解と解釈を中心としていたのであった。

さて中国と西洋とにくらべて、インド古代哲学はその多様な姿を中国よりも長く保存して紀元後六世紀頃までつづき、最後は正統学派のブラーマニズムが民族宗教の形で再現する。しかしその後ユダヤ教の伝統に属するイスラム教の侵入をうけ、インド思想はヒンズー教とイスラム教とに文字通り分裂し、中国や西洋の中世のような新たな形での古代哲学の再形成には至りえなかったと認められる。

さて以上のような、それぞれちがった形での古代哲学の継承が、三つの伝統の中に示され、そのことの意義はなおいろいろ考えねばならないと思われるが、概していえば紀元十六世紀頃までは、三つの古代哲学の伝統は、互に同格を保っていたといえるであろう。例えば十六世紀後半に中国や日本に来たジェスイットの宣教師は、中国や日本に、西洋の哲学と同格に、世界と人生とについての理性的解釈を与える哲学が、儒教や仏教として存在する、と認めねばならなかったのである。

しかしながら、改めていうまでもなく、丁度その頃に西洋の哲学は、その自然学において、中国やインドの古代自然学はもちろん古代ギリシャのそれをも超えた客観性をもつ知識に到達しつつあったのである。西洋の哲学的伝統において、古代哲学の解釈を超える一歩が、自然学において踏み出されたのである。十七世紀にはじまるこの自然学の躍進が一世紀後に産業革命を生み、この西洋の技術文明がいわば仲介者となって、哲学の三つの伝統及びユダヤ教の伝統が相互作用を起しはじめ、その過程は現在も進行中であること、これは今さら説くまでもない。

さてこのような世界の哲学の進みの中でわが国の哲学はどういう動きを示して来たか。われわれは中国の古代哲学の展開が終った後に、そして中国に仏教が入った後に、中国から哲学をうけと

ったのであった。時期からいえば、西洋のゲルマン諸族つまりいまの西洋人が古代ギリシャ哲学を学びはじめた時期と、日本が中国哲学を仏教とともに学びはじめた時期とは、大体同時である。そしてわれわれは、島国であるせいもあって、中国哲学と仏教との理解において或る程度の自由と独創とを実現することができたとみとめられる。鎌倉仏教や徳川時代の儒学についてそのことがいえるであろう。明治以後のわれわれの新自然学の受容、技術の摂取についても同様なことがいえるであろう。

＊

もう二十年も前に、トインビーの世界史論などを読んで、哲学史一般についての上のような見分をするようになった。これはもちろん外枠のようなもので、入れる中味の方は大部分専門研究者に仰がなければならないが、この枠のおかげでいろいろ気付くこともあるのである。――例えば近頃の中国哲学史の研究は、従来よりも積極的に中国の技術史や宗教史に関心を向けつつあるように思われる。いま宗教についてだけ考えると後漢から南北朝時代にかけて西域からの仏教の伝来と平行して道教の形成があったことが明かにされて来ている。（京大の福永光司教授の研究等）。そして道教は「三国志」に出て来る張魯の五斗米道のようなものからはじまっているとすると、素人眼には道教は一種の二元論乃至人格神論の型を示しているように見える。そういう思想の型は古く墨子に現われその後の中国哲学では見受けなくなっていたのではないかと思われる。ところで日本人が中国思想と交渉をもちはじめたのは魏晋の時代からであるとみとめられ、儒教仏教とならんで或はそれらよりも先に日本に道教思想の影響が及んでいたとも考えられる。日本の神道の形成に道教からの寄与があったのではないかとも思われる。律令国家の構造において道教的なものがはっきり指摘できることは専門家のいうところであるが、神道の考え自体が類型的に道教に通ずるものをもっているといってよいかも知れない。

そういうことを素人として考えたりするが、上の枠はそういう示唆を与えるとともに、また私にとっては西洋近世の哲学そのものの抱えていた問題の全体的な把握にも役立っている。西洋近世において新自然学の形成にともなって哲学が古代哲学の解釈によって処理し切れない問題に直面し、そこから倫理においても論理においても新たな動きが生れていることが認められるが、その新たな動きは古代ギリシャ哲学と西洋近世哲学とをつき合せる試みをくりかえすことによってはっきり捉えうることを私は度々経験するのである。上のような哲学史の枠を考えることによって「近代化」ということを、広い視野で、かつ内面に立ち入って、問題にできると思うのである。